

共和政末期から元首政期におけるローマ市民社会における諸階層と労働（職業）観
－問題関心と分析概念としての階層区分の関係を中心に－

島田 誠

はじめに

外国史、それも現代とはるかに隔たった古代史を研究していると、研究者の対象とする社会に抱いているイメージや問題関心の役割の大きさを痛感することが多い。元々史料の絶対量がさほど多くなく、しかも、その史料の分布に時代的・階層的偏りがある場合には、再現される歴史像は研究者のイメージの枠を大きく越えることはできず、そのイメージも問題関心に制約されているのである。もちろんこれらの点は、個別研究においては必ずしも明記される必要はないが、実際には研究の成果も問題関心のあり方、あるいは問題関心をどれほど自覚しているかの左右されることが多いのではなかろうか。

さて、私の当面の課題は、「共和政末期から元首政期のローマ社会における諸階層と労働（職業）観」の研究である。そこで、小稿では対象とする社会（ここではローマ社会）のイメージや問題関心に言及しつつ、研究を進めるための方向性を考える作業を行なってみたい。

1. 問題の所在

研究者の問題関心に伴うローマ社会のイメージは、幾分乱暴に分けると次の三種になるように思う。Ⅰ．ローマ（を含む古典古代）社会と研究者の属する社会との類似点・連続する点に注目し、ローマ（古典古代）社会に近代的イメージを持つ。Ⅱ．ギリシア

・ローマ社会の近代社会と異なる点に注目してギリシア・ローマ社会をプリミティヴな社会と考える。Ⅲ．ローマ社会の特定の側面を近代社会と比較するのではなく、近代社会との類似点も相違点も含めて一つの固有な社会と考える。

これら三種中、Ⅰの立場は、ギリシア・ローマ世界が古典古代と呼ばれ、近代社会が模範とすべき近代と通じる点の多い社会とされていたことから分かるように、古くから有力な問題関心である。そして、今世紀では古代の「資本主義」を17・8世紀ヨーロッパの資本主義に匹敵するものとし、文明の担い手として「都市ブルジョワジー」の役割を高く評価したロストフツェフにおいて豊かな成果をあげた。Ⅱの立場は、1973年初版の出した M.I.Finley の『古代の経済』The Ancient Economy の主張を受けて有力になったものである¹⁾。この考えは、18世紀以降のヨーロッパ社会とギリシア・ローマ社会との相違点を強調しつつ、多くの成果を現在あげつつある。これに対して、Ⅲの立場は、明確な問題意識と影響力を持つ研究が未だ存在せず、従って、個別・断片的な研究状況に留まっている。

このようにⅠ・Ⅱの問題関心は、ギリシア・ローマ社会を模範（古典古代）として意識しつつ、一つの文化圏としての近代社会を形成し、やがてその影響下から抜け出ようとしているヨーロッパにおいて豊かな成果を挙げ、また挙げつつある。Ⅰの立場は、すでにその「歴史的」役割を果たし終ったかのように思われるが、Ⅱの立場は、現在では「新たな正統派として有力になった²⁾」とも言われ、正しく70年代半ば以降の支配的な潮流であるといえる。しかしながら、このⅡの潮流は、近代社会のユニークさ・固有性の認識から一步進んで（後退し？）現状肯定に墮する危険がある³⁾。その際に、肯定されるのはまず何よりも文化的統一体としてのヨーロッパであろうが、ヨーロッパとは近代資本主義体制のみを共有している現代日本の研究者にとっても、同様の危険が存在するように思われる。従って、Ⅱの立場の生産性を認めつつ、Ⅲの立場で問題関心を明確化することが、最も豊かな成果を期待できるのではなかろうか。

さて、当面の課題である「共和政末期から元首政期のローマ社会における諸階層と労働（職業）観」に関連し、まず注目されるのはキケロの『義務論』中の有名な一節の解釈である⁴¹。

この一節は「さて、手職や収入の途について、何が自由人にふさわしく、何が卑賤と見なすべきかをほぼ次のように我々は聞いている。⁵¹」との文句で始まる。そして、キケロは、卑賤なものとして①人に憎まれる徴税人 portitor や金貸し、②技術 artesではなく労力 operae が買われる雇い人、③利益を挙げるために虚言を弄する小売商、④あらゆる職人、⑤魚屋・肉屋・コック・鳥の肥育商・香油商・各種の芸人など人の快楽に仕えるものを挙げる。一方、名誉あるのは、⑥高度の熟練と有用性のある医術・建築・教育、⑦小規模なものは別にして、収益を農地に投資する場合の大規模な商業、⑧最も自由人にふさわしいものとしての農業に従事する者達であるという。

キケロの証言に対するかつての一般的評価、即ちⅠの立場からする評価は否定的なものだった。例えば、この証言は「貴族的偏見、スノップさ、牧歌的過去へのノスタルジア⁶¹」と評価されていたのである。ところが、Ⅱの立場を代表するFinleyはキケロの証言に対して肯定的評価を下している。“Orders and Status”と題する『古代の経済』の第二章において、キケロのこの一節が引かれ、「キケロが（当時のローマ）社会で広く行なわれていた判断と主張するものを述べ」、「キケロは広く行なわれていた価値評価への悪いガイドではない」とされている⁷¹。さらにFinleyは、「我々の関心は広く行なわれていたイデオロギーにあるべきであり（中略）イデオロギーは、決して階級の境に沿ってきっちりと分かれず、逆にその作用は、効果があれば、正にそれらの境界を越える⁸¹」と述べ、富裕なギリシア・ローマ人にとって職業選択を含む経済的選択に際しても、その地位に相応しいかどうかという判断が大きな比重を占めており、キケロの時代を特に取り上げたのは、それが政治的危機・権力闘争・伝統的モラルの動揺・諸価値と現実の衝突の時代であり、この時代にも地位に基づく（判断）基準status-based-model

が健在ならば、他の時代にもこの基準が存在することは確実であるからだという⁹⁾。

ところが、この両者のいずれとも異なり、言わばⅢの立場に属するといえる解釈がすでに60年代に存在していた。イタリアのローマ法学者F.M.de Robertis が『ローマ世界における労働と労働者』 *Lavoro e lavoratori nel mondo Romano* と題する著書において次のような見解を述べていた¹⁰⁾。ローマ社会では古典文学や法史料から知られる支配階層の世界 *L'ambiente aulico* (洗練された宮廷的社会) と金石文やバビルス文書から知られる *L'ambiente volgare* (大衆の社会) との間に大きな相違があり、前者は閑暇 *otium* を高く評価するが、後者は労働の価値を高く評価した。そして、キケロの問題の一節はここでは *L'ambiente aulico* の典型例として分析されている。

以上のように、Finleyは、ローマ(ギリシア)人自身による社会的区分・身分に基づく *status-based-model* の重要性を説き、一方 de Robertis は *L'ambiente aulico* および *L'ambiente volgare* という彼自身の創案になる一種の社会階層による労働観の相違を指摘する。また、de Robertis の著作への書評論文において、D.Nörr は、*L'ambiente volgare* の証拠とされる史料は実は中産層 *Mittelstand* に属すと主張する¹¹⁾。先に述べたように小稿の目的は、Finleyに代表されるⅡの立場の生産性を評価しつつ、de Robertisの与するⅢの立場での研究を進めるための方向性を考えることであるが、このように当時の社会階層のとらえ方が各説の重大な相違点となっている。そこで、まず対象とする時代(共和政末期から元首政期)のローマ社会の階層分化についての諸説を検討したい。その上で、キケロの証言の再検討を含む史料の検討に基づいて、諸階層と労働(職業)観の関係についての見通しおよび今後の個別実証的な研究の方向性について考えてみたい。

2. ローマ社会の諸階層

小稿が対象とする時代のローマ社会の諸階層についての研究状況は、最近W.V.Harrisによって明快に整理された¹²⁾。そこで、小稿でもまずHarrisの整理にしたがって諸説を示した後に、どの見解を採用すべきかを考えてみる。

Harrisによれば、ローマ社会の諸階層に関する諸説は(1)ローマの社会はローマ人自身の概念によって分析されるべきであるとの考え、(2)社会学の諸概念、特に社会成層stratificationを導入する考えがあり、最後に階級classの概念を用いるものがある。それが更に(3)マルクス主義の階級論に従って「生産関係に結び付いた」階級を想定するもの、(4)Harris自身の提案による三階級論に分れるという。そして、Harrisの提案(4)を除き、それぞれの説に従って近年大きな成果を挙げて影響力を持つに至ったか、或は注目すべき見解を述べた例としては(1) M.I.Finley・(2)G.Alföldy・(3)G.E.M.de Ste.Croix がそれぞれ挙げられる。ところが、Harrisは、三説を検討・論駁するに際して、各説の具体例の詳細にはほとんど言及することはなく、その批判も概ね一般的議論に留まる。例えば、ordinesに関して、この概念が裕福な者も貧乏な者も含めて、かなり多くの市民達を分類しないままに取り残してしまうとの指摘や、社会成層の理論が富・権力・生活の便宜amenitiesの不均衡を見失わせるとの指摘などは、有効かつ説得力を持つものであるが、決定的とは言えず、それなりに有効な反論が可能な性格の議論である。

私見では、これら各説からの選択は、Harrisの如く、それぞれの論理構成を直接に比較することによって行なわれるべきではなく、まず何よりも研究者の問題関心より決定されるべきであると思う。即ち、問題関心のあり方により、どの階層論が最も有効な、豊かな成果をもたらす分析概念であるかが、自ら定まるのである。そして、実際の選択は①問題関心と分析概念の適合性の検討、②分析概念およびそれを用いた研究手続きの内的論理の整合性を批判した上で、③各研究の対象とする社会における有効性を検討するという手順で為されるべきであろう¹³⁾。

以下では、まずFinley・Alföldy・Harris自身の場合、最後にマルクス主義の立場をとる de Ste.Croix について少し詳しく説明した後に、小稿ではどの説を採用すべきかを検討したい。

まず、Finleyであるが、彼は階級 classの語は漠然とした非術語的な文脈でのみ用いると述べ、元老院議員身分・騎士身分など同時代において法的に定義されていた集団をさす語を orders=ordines として、あるいは nobilesなど正式な法的身分ではない語をも status として用いるとしている¹⁴⁾。史料に階層的偏りがあるにもかかわらずギリシア・ローマ人自身の用語を採用する理由は、階級の境界を越える有力イデオロギーに注目して近代社会とギリシア・ローマ社会との相違点に注目する『古代の経済』における問題関心を想起すれば容易に理解できるだろう。

ところで、Harrisは註で触れるのみで詳述していないが、Finleyは、『古代世界における政治』Politics in the Ancient Worldと題する後の著作で幾分異なった観点からギリシア・ローマの社会階層を記述している¹⁵⁾。この著作で、Finleyは、主としてアリストテレスの『政治学』によりながらギリシア・ローマの政治における富裕層と貧困層という対立抗争する2階級 classesの重要性を指摘しているのである。Finleyのここでの態度は、一見前著における態度と矛盾しているように思われるかもしれない。しかしながら、ここでの階級 classの語の使用は、彼自身も確認しているように¹⁶⁾、前著でも容認されている非術語的用法である。しかも富裕・貧困という2階級は、既に古代の（ギリシア語）著作によってローマ社会の分析に用いられている語であり¹⁷⁾、この点でも前著の基本的方針に合致している。

一方、Alföldy の議論は、ローマ社会がその歴史を通じて近代社会のみならず他の前近代社会、なかんずく他の古代社会と明瞭に区別され、ピラミッド型の構造を持つ同一のタイプの社会であるとして、その社会層分化を自らStände-Schichten-Modell と呼ぶものとして把握する¹⁸⁾。

この社会の特徴が最もよく表われた元首政期のモデルを略述するとほぼ次のようになる。まず、ピラミッドは上層 *Oberschicht*=*honestiores*と下層 *Unterschicht*=*humiliores* に分けられる。そして、上層は、諸身分 *Stände*=*ordines* として把握され、元首一家を頂点に上から元老院議員・騎士・都市参事会の三身分に分れる。一方下層は、身分ではなく社会層 *Schichten*として把握されるが、この社会層は成層構造をとらず、タテ割に都市大衆 *plebs urbana* と農村大衆 *plebs rustica*に分れ、それぞれが更に奴隷・解放奴隷・出生自由人に分れる。

次ぎにHarrisの三階級論である¹⁹⁾。この議論はローマの内的隷属を分析するために提起されたものであり、次の三階級からなる。①生計を専ら奴隷その他の隷属労働に頼っている富裕階級。②多数の奴隷を使用するだけの資産は持たないが、自立して生存するために必要な最小限の土地および家族労働力、もしくは技術と仕事場を所有する独立の階級。③雇人*mercennarii*、隷属した労働を行なう者達、そして奴隷。

最後に、マルクス主義に基づきアルカイク期からアラブの侵入に至る（前7～後7世紀）ギリシア世界を直接の対象としつつ、ローマにも触れる de Ste.Croix の階級論について述べる²⁰⁾。この著作での de Ste.Croix の階級論は、マルクスへの依拠を明言していることを除けば、『古代世界における政治』での Finley や Harris 自身の議論と重なる点も少なくなく、むしろ幾つかの点で両者に対してプライオリティを主張できると言える。

de Ste.Croix によれば、階級 *class*は次のように定義される²¹⁾。まず階級は有産階級 *propertied class* による無産階級の搾取関係を本質とする。ギリシア・ローマ世界における主たる生産手段は土地と非自由労働であり、個々の階級は生産関係における位置によって定められた人間集団である。しかし、同時に法的地位や搾取の規模も階級を決定する要因であり、莫大な土地と奴隷を所有するローマの元老院議員達が一つの階級と見なされうるなど有産・無産階級は更に細分されるという。

その他、de Ste.Croix の所論には注目すべき点が幾つかある。⑤アリストテレスの『政治学』におけるギリシア・ボリスの分析、特に有産者 euporoi・無産者 aporoi とを基本的な区分と見なす点にマルクスとの類似点を見出すこと²²⁾、⑥一般には別々の階級として扱われる奴隷・賃労働者・その他の貧しい自由人労働者が、時に単一の階級（もしくは階級集団）と見なすべきかもしれないとを認めること²³⁾、⑦他人の労働を搾取もせず、また自らの労働を搾取もされない者達が、一種の中間階級を形成するが、彼らも国家や都市の徴税・徴兵・強制義務などで間接かつ集団的に搾取されていたとすること²⁴⁾ の三点が挙げられよう。すでに明らかであろうが、これらの中で⑤は『古代世界における政治』での Finley の議論と同じ材料に基づいており、⑥はHarrisの三階級論の主要な議論と一致する。一方⑦において中間階級の独立性を如何に考えるかが、Harrisとの決定的な相違点となるだろう。

これらの階層論を、研究の出発点である問題関心に即して分類すると Finley の問題関心、更に Alföldyもローマ社会と近代社会の相違点に注目する点でⅡの立場に属すると言えよう。ただし、他の古代社会とローマ社会との相違を主張する点では、Alföldy はⅢの立場に属するとも言えるかもしれない。マルクス主義に立脚する de Ste.Croix の議論も、生産条件における土地と非自由労働の重要性を強調する点でⅡの立場に属するといえよう。一方 Harris の議論は、近代社会との異同ではなく、ローマ社会そのものの特質に注目するⅢの立場に属しているといえる。

さて、これらの立場との適合性という点と内的論理の整合性について言えば、ほぼギリシア・ローマ人自身の概念を使用するというFinleyの徹底性が、ギリシア・ローマ人に共通の支配的イデオロギーの抽出と言う点に関しては豊かな成果を約束しているように思う。また de Ste.Croix もHarrisも、それなりに彼ら自身の問題関心に適合した分析概念を提案している。de Ste.Croix は、何人も存在を否定できないギリシア・ローマ世界における搾取関係に基づく階級論を展開しており、奴隷労働の非自由労働に占め

る比重など必ずしも説得的ではない点もあるが、学問的な批判に耐えうるものである。ただ de Ste.Croix が法的地位や・搾取の規模を階級の決定要因に加えたことは、階級の数を増殖させて議論を徒に複雑にしたようにも思われる。一方、Harrisの三階級論も、経済的要因を本質とし、実際には生計を支える労働の質を階級区分の基準にするという、一貫したものであり、分析概念としての使用に十分に耐えるもののように思われる。更にこの三階級論は共和政末期から元首政期にかけてのローマ社会について我々が持っている知識にも良く適合するように思われる。例えば de Robertisが *L'ambiente volgare* と呼び、Nörrが中間層 *Mittelstand*と指摘した階層は、正にHarrisの②階級に当たるように思える。

これらに対して、Alföldy のモデルはその性格が曖昧である。果たして研究の手段、分析概念なのか、或はある時点のローマ社会の実態を階層的観点から叙述したものなのかははっきりしない。このモデルは、分析概念としては複雑過ぎるし、社会層区分の基準に一貫性がない。既存の史料に新しい光をあてる観点がある訳でも、新たな発見を予測する理論的見通しを与えてくれる訳でもない。一方、実態の描写とすると、図式化が過ぎるし、個々の社会層の位置付けに問題がある。このモデルは、あたかも元首政期の何人かの出身階層の異なり、生存時期も微妙に異なる人々の社会的区分に関する意識を結合した上で模式化したような印象を受ける。現代社会とローマ社会の相違を認識させるための教科書的効用はあるかもしれないが、研究のレベルで果たして意義を持ちうるのだろうか²⁵⁾。

では、小稿は以上のような諸説中のいずれを採用すべきであろうか、或は全く別の階層論を創案すべきであろうか。まず、問題関心との適合性という点では、Harrisの三階級説と Alföldyのモデルが、小稿に近いものといえる。この両者の中では、分析概念としての内的論理の整合性という点に関し、先に述べた如くHarrisの所論が優れている。

そこで、最後にHarrisの三階級論、特に中間階級に独立性を認める考えが、共和政末期から元首政期のローマ社会の研究するために有効な分析概念と言えるかどうかを検討せねばならない。

結論を先取りして言えば、二つの理由からHarrisの三階級論は有効なものであると私は考えている。まず第一に、de Ste.Croix が中間階級に関して指摘した国家・都市を通した間接的な搾取の大きな部分が、この時代のローマ市民に関しては取り除かれていたこと、第二に、断片的ではあるが、この時代の史料から中間階級ローマ市民が、他の二階級とは異なる独自の意識を持つと推定される証言が存在することである。

前 167年、第三次マケドニア戦争の勝利の結果、ローマの国庫には莫大な戦利品と歳入がもたらされ、それ以後ローマ市民は土地税tributumを実質上免除されることになった²⁶⁾。もちろん、徴兵や地方都市における諸義務は存続したが、最も基本的な生産手段である土地への課税が免除されたことの意義は大きかったと思う。更に共和政末期には、軍勤務に志願兵制が取り入れられ、無産市民に戦利品獲得の機会を与えたのみならず、退役に際しては土地を分与される慣習が定着するなど、ローマ市民にとって軍勤務は生計補助の一手段という側面を持つようになった²⁷⁾。この結果、ローマ市民にとって国家を通しての搾取はもはや重荷ではなくなったと考えられる。この状況が大きく変わるのは、地方都市での諸義務 munera が皇帝権力の手で整備されて、M.ウェーバーなどがライトゥルギー国家と呼び、A.H.M. Jones がカースト制度と呼んだ国家制度が成立する基盤ができる後2世紀半ば以降からのことである²⁸⁾。従って、正しく共和政末期から元首政期にかけてのローマの中間階級は、かなりの程度、国家・都市を通しての搾取から免れていたと考えられる。

後1世紀半ば頃の南イタリアのカンパニア地方に所在する一都市を舞台とする『サテューリカ（サテューリコン）』の登場人物である元奴隷のローマ市民が、宴席での口論に際して興味深い発言をしている。幾分長くなるが引用してみたい。なお、便宜上文章

に記号を付した。

「Ⅰあなたはローマ騎士だが、私も王の息子だ。『それでは、おまえはなぜ奴隷だったのか』(とのあなたの疑問に答えよう)。Ⅱ何故なら、私自身が私を奴隷身分となし、納税民 tributariusであるよりもローマ市民であることを望んだからである。Ⅲ-1そして、今私は、何人も私を笑い物にしないように生きることを望んでいる。私は、一人前の人間であり、顔を挙げて歩いている。Ⅲ-2私は、誰にも一銭も借金しておらず、弁済期日を約束したこともなく、何人も法廷において私に『借財を返せ』と言ったことはない。Ⅲ-3私は、一筆の土地を買い、多少の金を儲け、20人の胃袋と一匹の犬を養っている。私は、奴隷時分の妻を、誰も彼女の髪に手を触れないように買い戻し、身の代金として千デナリ支払った。Ⅲ-4私は、就任金なしに(アウグストゥス礼拝)六人委員に選ばれた。私は、死んで恥ずかしくないように死にたいと思う。²⁹⁾」

以前、私はⅠ・Ⅱの文章に基づき、ローマ市民団の中にローマ騎士・王族など社会の上層に属すかどうか、或はローマ市民か否かという二種類の人間評価の基準が存在すると論じたことがある³⁰⁾。この議論自体は正しいと今でも考えているが、この発言は中間階級ローマ市民の自己認識を陳べたものと見なすことも可能である。そう考えれば、この証言は、次のように解釈できる。Ⅰの文章は、この元奴隷のローマ市民が(元老院議員身分を含む広義の)騎士身分、支配的富裕階級に少なくとも現在は属していないことを示している。Ⅱの文章は、支配的富裕階級に属さぬ中間階級の地位が、土地税免除というローマ市民の特権に依存していたことを示唆する。そして、Ⅲの文章は、中間階級ローマ市民の社会的・経済的状況を具体的に示していると言えるだろう。

ここで、Ⅲの内容について少し敷衍したい。まず、Ⅲ-1とⅢ-4は、中間階級ローマ市民の享受している社会的prestigeを誇示している。次に、Ⅲ-2とⅢ-3は、この階級の備えているべき経済的条件を説明していると言えよう。Ⅲ-3は、この階級の生計が、小規模の土地と幾許かの動産所有に基づき、家族と小人数の奴隷の労働力に依存する小

経営で支えられていたことを推測させる。また、Ⅲ-2は、この小経営が借財を通して他の（恐らく富裕階級のより大規模な）経営に従属せず、独立しているべきであるとの理想を示しているのであろう。もちろん、この証言が中間階級ローマ市民の意識を正しく代弁しているかどうかは、今後の個別研究によって確認され続けねばならないだろう。しかしながら、三階級論、特に中間階級の独立性の指摘によって³¹⁾、共和政末期から元首政期に掛けてのローマ社会の重要な側面が指摘されたことは確実であろう。

以上から、小稿においてはHarrisの提案した三階級論の採用が、最も豊かな成果をもたらすと考えられる。

3. 諸階級の労働観

以下、Harrisの三階級論を分析道具として共和政末期から元首政期のローマ社会における各階級の労働観を検討することになる。しかしながら、この課題は、実証的な個別論文に相応しいもので、大まかな理論的見通しを述べるだけの小稿の蕪雑な議論には本来は馴染まぬものである。そこで、まず各階級毎に現存する史料の状態と今思いつく研究上の問題点を列挙した上で、若干の史料と研究状況の検討を試みることに留めたい。

奴隷などの隷属労働に全面的に依存する富裕な支配階級については、古典文学を中心に比較的多くの史料が残されている。この者たちについて問題となるのは、次の二点だろう。第一に、古典文学作品上で述べられている労働（職業）の評価に関する見解と実際に生活を律していた規範とが、どこまで一致するのか。第二に、この階級の労働（職業）観が、どの程度安定したものだったのか。

一方、中間階級についての史料状況は、断片的かつ間接的なものである。古典文学では、先に挙げた『サテューリカ』など例外的な作品にしか中間階級についての言及は見られない。この階級についての主たる史料としては、むしろ墓碑銘を中心とする数多く

の碑文史料に注目すべきだろう。そして、この階級の研究で問題となるのは、まず古典文学におけるこの者達の描写に偏りが予測されること、次に碑文史料もその記事の多くがステロタイプなもので、個々の史料の情報量が少ないことが挙げられる。

最後に隷属労働に服する者達については、そもそも史料が欠如していることが最大の問題点である。従って、この階級の労働観を史料に基づいて再構成することは断念せざるをえない。

さて、ギリシア・ローマの文学、所謂古典文学は、ローマ社会の一般的な状況よりも特定の個人の行動を道徳主義的見地から記録すること好み、一般的状況を述べる場合にも、多くの場合、例えばローマの事例を挙げつつギリシア哲学の理想を説くなどの特殊な執筆動機を持っていたと言われる³²⁾。これが、富裕な支配階級についての第一の問題の原因である。また、多くの証言が一見ほぼ同じような価値観を述べているにもかかわらず、第二の疑問、その安定度への疑問が生じるのも同じ理由からである。そして、1章で取り上げたキケロ『義務論』の記事の解釈、特にFinleyの解釈に、この二つの問題が集約した形で現われているように思う。

Finleyによれば、キケロの『義務論』の一節は、共和政末期のローマ社会の価値評価をかなり正確に反映しており、この価値評価は、ギリシア・ローマ世界に共通のものであるという³³⁾。即ち、Finleyは、ローマ社会に関するキケロの史料的価値の高さと年代的には1000年以上、地域的にはギリシア・ローマ両方にわたるイデオロギー status-based-model の安定性を主張をしているのである。果たして、Finleyの解釈は、妥当と言えるであろうか。

まず、キケロの証言の史料的価値についてFinleyの議論を再検討する。彼の議論中で再検討を要するのは、①キケロのこの一節の対象を何と考えるか、②キケロの金貸しに関する評価を如何に考えるかに二点であろう。

①について、Finleyは原文の *de artificiis et quaestibus* を「手職と仕事について

in regard to trades and employments」と訳し³⁴⁾、対象が、基本的には職業に限定されていると考えているようである。このことは、雇用労働や農業経営が必ずしも職業 occupations ではないのでキケロの分類は厳密には正確ではないと、わざわざ彼が注記していることから逆にも明らかであろう³⁵⁾。ところが、このFinleyの対象理解は、不適切であり、ラテン語の解釈の上でも納得できない。まず、artificiumを熟練を要する手仕事として tradeと訳するのは、万人の納得する訳語であろう。しかし、quaestusを仕事employmentと訳するのは、限りなく誤訳に近い不適訳であろう。quaestusなるラテン語は、金儲け・収入、或はその手段を指す語であり、例えば、元老院議員の副収入やそのための手段もquaestusと呼ばれるのが普通である³⁶⁾。職業を意味する場合もあるが、その場合も（儲けの多い）収入の手段の一種としての職業である。従って、キケロがこの一節の対象としたのは、専門的職業も「副業」も含めた収入の手段一般と解するのが妥当である。

②の金貸しの評価が問題となるのは、キケロ時代には（かのブルトゥスも含めた）多くの元老院議員達が、法定金利をはるかに越える高利貸しを営み法外な利益を得ていた事実がよく知られているからである。Finleyは、職業としての金貸しとアマチュアとしての元老院議員の金貸しを区別し、後者は他の職業収入と見なされない軍事的・政治的収入が触れられていないのと同様にキケロの議論の対象ではないと主張してこの問題を解消しようと試みている³⁷⁾。しかしながら、Finleyの主張は、彼自身が職業ではないとする農業経営がキケロの議論に含まれる事実と矛盾するし、何よりも、前提となるキケロの議論の対象が専門的職業であるとの考えは、先に述べたように成立せず、この主張そのものがナンセンスと言えよう。このようにキケロの議論と当時のローマ社会実態は、必ずしも一致しない。

では、ローマ社会の実態に基づかないとすれば、キケロの議論は、一体何に基づくのだろうか。この点について、P.A.Brunet は、キケロのこの一節がロドス島出身のストア

派哲学者パナイティオスに準拠すると指摘し、大方の賛同を得ている³⁸⁾。『義務論』のような書物を著わすときに自国の実態よりも外国の学者の所説を尊重することは、一見奇妙に思われるかもしれない。しかし、ローマにとってのギリシア文化は、日本にとっての中国文化と同様であり、このような事実も格別珍しい訳ではない。以上、述べてきたことから、キケロの一節の史料的価値の高い評価に基づきギリシア・ローマ世界でのイデオロギーの安定性を主張したFinleyの論拠は崩れたと思う。

ここで話を本筋に戻すと、次のことが明らかになった。富裕階級の労働（職業）観についての古典文学史料の証言は、必ずしもローマ社会の実態を反映したものではない。従って、その安定度も、キケロ『義務論』の一節のような、古典文学の一見典型的と思われる証言に基づいて簡単に判断することはできないことになる。富裕階級の労働（職業）観も、古典文学の証言に安易に寄り掛かるのではなく、注意深く再検討すべき対象となるのである。

中間階級の労働（職業）観の研究において、まず問題となるのは、古典文学中にこの階級についての記事が乏しく、しかも、彼らは真面目にではなく喜劇的に扱われてると考えられていることであろう³⁹⁾。確かに、この階級について触れた古典文学中で最も詳しい『サテューリカ』の記述を見ても、誇張が多い。しかし、『サテューリカ』の記事は、慎重に扱わねばならないにしても、史料として用いることが望ましい。それは、多くの研究者の如く⁴⁰⁾、元老院議員に匹敵する財産を持つとされる、いささか空想的な大金持ちの元奴隸トリマルキオに関心を持つからではなく、彼の宴席に列する者達の描写に興味を持つからである。例えば、2章で引用した元奴隸の中間階級としての意識や首（肩）で丸太を担ぐ無一文の境遇から幸運を掴んで一財産作ったという人物についての短い噂話に⁴¹⁾、ある種のリアリティを感じるのである。私見では、これらの描写は、中間階級に関する断片的史料に一貫した説明の筋、文脈を与える手掛かりとなるだろう。

中間階級に関する主たる史料である墓碑銘を中心の碑文史料の問題点は、その記述が短く、個々の情報量が乏しいことである。得られる情報は、被葬者の職業・家族構成・就任できた（同職組合や地方都市の）役職などにほぼ限られ、しかも、職業や役職については、名称が知られるのみで実態は全く不明という場合も少なくない。

ここでは、この分野での研究の状況を見てみたい。碑文の発掘報告や支配的富裕階級との個別の保護関係（クリエンテラ関係）のプロソポグラフィ的な研究を別にする、碑文史料に基づき、中間階級の職業を扱った最近の研究としては、管見では、ローマ市での雇い人 *mercennarii* や店主？ *tabernarii* の地位を論じた S.M.Treggiari の論文とイタリアで発見された職業を示す図像に関する G.Zimmer のモノグラフがある⁴²⁾。これらの中で前者は、ローマ市で知られる 160 種余りの職業の一覧表を掲げるなど有益な点もあるが、いささか超時代的かつ羅列的である上、対象がローマ市に限られているという弱点がある。一方、後者は、図像の発展から、死者の職業を示すモチーフが既に共和政末期に南イタリアのカプアで知られること、手仕事への高い評価が、後 1 世紀には確認でき、それが 1・2 世紀の変り目には絶頂を迎えることなど興味深い事実を指摘するが、イタリア内での地域差をどう評価するかの問題が残るように思われる。

碑文史料の検討は、情報量の問題を解決するために、可能な限り多くの関係碑文を蒐集することに加えて、地域差・時代による変化を考慮に入れて行なわれねばならない。その上で、『サテューリカ』他の古典史料中の証言を勘案すれば、中間階級の労働（職業）観の再構成は十分に可能であろう。

おわりに

我々が実証的な個別論文を書き始める時、研究の目的は既に明らかであり、また何をどのように論証するかも考慮済みである。多くの場合、研究目的は、研究史の流れの中

で見出され、論証のための手段、分析概念も既存のものから選ばれるだろう。このような手続きは、歴史研究者にとっては日常的なものである。しかし、この手続きの中に陥穽が待ち受けていることも事実であろう。日常的な作業の中で自らの問題関心を見失ってしまう危険が存在するのである。

個別研究の目的が問題関心に規定されるのは自明のことであろう。ここでは、既存の研究史を支える問題意識と自分の問題意識との関係を正しく認識するように注意すべきだろう。これに対して分析概念の選択には、より複雑な問題が存在するように思う。小稿で述べてきたように研究者は、分析概念についてフリーハンドの選択権を持つのではなく、問題意識と分析概念の適合性という厳格な枠に従わねばならず、更に分析概念の内的論理の整合性が確認され、その分析概念が豊かな成果をもたらす可能性が確認されて初めて選択がなされるべきである。そして、この三つの過程は不可分の一体を成すと考えられる。

さて、以上のような手続きで採用された三階級論に基づいて具体的研究を進めるための見通しを確認しておきたい。まず、この時代のローマ市民社会では、支配的富裕階級と隷属労働に従事する階級の他にローマの地中海世界支配の結果、国家・都市を通した搾取のかなりの部分を免れた独立の中間階級と見なすべき社会階層が存在していた。第二に古典文学の史料価値の検討から、従来安定したものと考えられていた富裕階級の労働（職業）観の再評価が必要となった。第三に、数多くの碑文史料の存在や断片的証言に一貫した説明を与える『サテューリカ』などの記事から、中間階級の労働（職業）観は把握可能と考えられる。従って、中間階級の労働（職業）観を検討・確定し、富裕階級の労働（職業）観をギリシア思想のみならず中間階級との相互関係・影響という面から検討することが、最も豊かな成果を挙げると期待できるのではなかろうか。

そして、もしも豊かな成果が実際に挙げられたならば、小稿の問題関心、共和政末期から元首政期のローマ社会の固有性に注目する関心が正当化されることになるのである。

註

- 1) M.I.Finley, The Ancient Economy, Berkeley & Los Angeles, 1973(2nd.ed.1985).
- 2) K.Hopkins, Introduction to :Trade in the Ancient Economy, ed.by P.Garnsey, K.Hopkins and C.R.Whittker, London 1983, p.xi.
- 3) もちろん Finley 自身の議論に、そのような危険の兆候が見られる訳ではない。しかし、いささか異様とも思われるほどの短期間で確立したⅡの立場の優位の背景としては、Finley のブリリアントな議論の他に (Finley の意図とは関係なく)、ヨーロッパの現状を肯定的に評価することを可能にする論理構造の存在が挙げられるのではなかろうか。
- 4) Cicero, de officiis, 1,150f.
- 5) Ibid., 1,150:Iam de artificiis et quaestibus, qui liberales habendi, qui sordidi sint, haec fere accepimus.
- 6) S.M.Treggiari, Roman Freedmen during the Late Republic, Oxford 1969, pp.88f.
- 7) M.I.Finley, op.cit., pp.41f.; p.52; p.57.
- 8) Ibid., p.38.
- 9) Ibid., pp.52f.; p.61.
- 10) F.M. de Robertis, Lavoro lavoratori nel mondo Romano, Bari 1963, pp.21-97 (esp. pp.21-35).
- 11) D. Nörr, Zur sozialen und rechtlichen Bewertung der freien Arbeit in Rom, Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte (Romanistische Abteilung) 82 (1965), pp.67-73.
- 12) W.V.Harris, On Applicability of the Concept of Class to the Roman World, in :T.Yuge & M.Doi eds., Forms of Control and Subordination in Antiquity, Tokyo &

- Leiden 1988 ,pp.598-610. この論考は、1986年 1月に、静岡県裾野市で開催された『古代世界研究国際シンポジウム』における口頭報告に補筆したものである。また、小稿で各説の例としてたのは口頭報告要旨において挙げられたものである。
- 13) 有効性の検討とは、具体的には幾つかの史料を選んで、その分析概念を用いることでどのような新しい知見が得られるかを検討することである。
- 14) M.I.Finley, op.cit.,pp.45-51. なお非述語的class の用法については、同書第2版(1985)、p.183 を参照のこと。
- 15) Idem, Politics in the Ancient World, Cambridge 1983,pp.9-12.
- 16) Ibid., p.10.
- 17) Ibid., p.4;p.10.
- 18) G.Alföldy, Römische Sozialgeschichte 2.Aufl.,1979,passim. なお Alföldyの所説については、南川高志、「ローマ社会の特質と元首政期政治史研究の課題」『古代文化』39-5 1987年、4-13ページにおける紹介を参照されたい。南川氏は、ローマ帝国統治下の社会という歴史的形成物が他の時代・地域と如何に違い、ローマ帝国の歴史的展開と如何に関係していたかの把握のために、Alföldy のモデルが有効な手段になると高く評価している。
- 19) W.V.Harris, op.cit. Harrisは、この論文のリード(p.598)において、ボリスが富裕層・貧困層・中間層の3部分からなるとするアリストテレス『政治学』の一節を引いている。一方、Finley, Politics...pp.10f. によれば『政治学』に時に現われるmiddle classは實際上重要ではなく、ギリシア人著作家によればボリスは2 classesに分けられるのが普通であったとする。
- 20) G.E.M. de Ste Croix, The Class Struggle in the Ancient Greek World, London 1981, passim (esp. pp.31-111).
- 21) Ibid., p.4;pp.42-49;p.65;pp.112-114.

22) Ibid., pp.77-80.

23) Ibid., p.68.

24) Ibid., p.33;p.44.

25) この点で、私は南川高志の註 18)掲載論文と大きく意見を異にしている。

26) Cicero, de officiis, 2,76;Plinius, naturalis historiae, 33,76;Plutarchus, Aemilius Paulus 38.

27) 軍隊勤務と土地分与については、P.A.Brunet,The Army and the Land, The Journal of Roman Studies 52(1962),pp.68-86. また弓削達、『地中海世界とローマ帝国』岩波書店1977年 93-97ページも参照のこと。

28) M.ウェーバー(弓削達・渡辺金一訳)、『古代社会経済史』東洋経済新報社 1959年 497-498ページ、A.H.M.Jones(P.A.Brunet ed.),The Roman Economy, Oxford 1974, pp.396ff.

29) Petronius,Satyrica, 57,4-6: eques Romanus es: et ego regis filius. "quare ergo servivisti?"quia ipse me dedi in servitutem et malui civis Romanus esse quam tributarius.et nunc spero me sic vivere,ut nemini iocus sim. homo inter homines sum,capite aperto ambulo;assem aerarium nemini debeo;constitutum habui numquam;nemo mihi in foro dixit"redde quod debes."glebularum emi,lamellas paravi; viginti ventres pasco et canem; contubernalem meam redemi,ne quis in capillius illius tergeret;mille denarios pro capite solvi; sevir gratis factus sum; spero, sic moriar, ut mortuus non erubescam.

30) 拙稿「元首政期のローマ市民団と解放奴隷」『史学雑誌』95-3、1986年 22-23ページ。

31) 私は、かつて中間階級の有力な構成部分である解放奴隷ローマ市民を対象として、旧主人たる保護者、特に支配階級に属する有力元老院議員のファミリアと解放奴隷と

の関係が重要であると論じたことがある（前掲拙稿 14-18および 22-23ページ）。ところが、旧稿では、保護者のファミリアが持つ2つの機能、①元奴隷が旧主人（保護者）のファミリアに属した（解放された）故にローマ市民となること、②支配階級に属する有力ファミリアが庇護民を引き立て、社会的上昇を促して支配階級に加え、そのメンバーを補充することの相違を十分に区別していなかった。①・②の機能は共和政末期から元首政期にかけてのローマ社会で共に重要な役割を果たしていた。しかし両者は、ローマ社会の異なる歴史的側面に属している。①の機能がローマ社会で重要と見なされようになったのは、先に述べたtributumの免除によって非支配層ローマ市民が中間階級として独立する可能性を与えられた後のことである。従って、①の機能の重視は、この時代（共和政末期から元首政期）のローマ社会に固有の性格である。一方、②の機能は、この時代に限らず、少なくとも共和政中期以降クリエンテラ関係を通して自己の階級の補充を図ってきたローマの有力者のファミリアに常に観察されるものである。従って、②の機能は、ローマ社会の通時的な属性である。小稿の問題関心からは、当然①の機能が重視されることになる。

32) e.g. E.Auerbach, Mimesis.Darstellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur 7.Aufl.,1982 Bern,pp.34-37（篠田一士・川村二郎訳、『ミメシス』筑摩叢書75上 38-40ページ）；D.Nörr, op.cit.,pp.71f.

33) 小稿1章の記述を参照のこと。

34) M.I.Finley, The Ancient Economy...,p.41.

35) Ibid.,p.44.

36) 例えば、元老院議員に一定限度以上の船舶所有を禁じたクラウディウス平民会決議の提案理由として「全ての quaestus は元老院議員達にとって無体裁と思われた」と記されている（Livy,21,63,3-4）。ここでの quaestus は営利活動（もしくは金儲け）としか訳せないだろう。

37) M.I.Finley, The Ancient Economy..., pp.53-57.

38) P.A.Brunt, Proceedings of the Cambridge Philological Society 199 (n.s.19) (1973), pp.27-34. Brunt説を受け入れた例としては M.W.Frederiksen, Theory, Evidence and the Ancient Economy, The Journal of Roman Studies 65 (1975), p.165 などを参照せよ。

39) 註32) 所載Auerbachの議論を参照のこと。

40) e.g. P.Veyne, Vie de Trimalcion, Annales E.S.C. 16 (1961), pp.213-247; J.H. D'Arms, Commerce and Social Standings in Ancient Rome, Cambridge Mass. & London 1981, pp.97-120. M.I.Finley, The Ancient Economy... も繰り返し「典型的」あるいは「真正の」との形容詞付きでトリマルキオに言及している。また Veyne は、既に古典的とも評される上掲論文において、「独立した解放奴隷」なるカテゴリーを提示した上で、その誕生には社会経済的要因はなく旧主人の援助という偶然の結果であり、言わば社会の上層（支配的富裕階級）の隠し子（派生）であり、（元奴隷という出自の欠点のなくなる）息子の代以降に社会の上層に復帰すると主張している。即ち、Veyne は、「独立した解放奴隷」に対して中間階級としての真の意味での独立性と階層としての安定性（継続性）を否定しているのである。Veyne 説の当否は、もちろん実証的個別論文で検討すべきものであるが、空想的なトリマルキオを議論の中心に置いたことが、その議論に影響を与えていることは否定できないと思う。

41) Petronius, Satyrice, 38,7-8.

42) S.M.Treggiari, Urban Labour in Rome: Mercennarii and Tabernarii, in: P.Garnsey ed., Non-Slave Labour in the Greco-Roman World (Proceedings of Cambridge Philological Society, Supplementary Volume 6), Cambridge 1980, pp.48-64; G.Zimmer, Römische Berufsdarstellungen, Berlin 1982.

[東京大学大学院・人文科学研究科]